
暗黒ダイヤのエレジィ

暁 神夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒ダイヤのエレジー

【Nコード】

N6634C

【作者名】

暁 神夜

【あらすじ】

パンドラは、ただ単に不老不死の夢を叶えるだけではなかった。
《パンドラを“暗黒食”の日に翳すと》暗黒食、それは太陽が隠れてしまう日。正と悪の悲しみと憎悪に満ちたメモリーをお聞き下さい。

《第1楽章》 動き出した意識

工藤邸の書斎は、下手な図書館よりもあらゆる文書の種類が豊富だ。

不定期だが掃除しに来るコナンに付き合う形で、哀は今工藤邸にいる。だが付き合うのは建前だった。

本当は珍しく興味が湧いたから。そして何かに、誰かに『誘われた』からであった。

「ま、しよせん暇潰しの口実ね」

行き当たりばったりで本棚から本を抜き取った。吸い寄せられるような気がしたが、気のせいだと思い返した。

高級仕様の本革椅子へ身を沈め、たまゆら独り言を出しながら哀はパラパラとページをめくった。

「灰原ーっ！ そろそろ帰んぞー！」

「はいはい」

遠くから、よく知った少年の声が届いた。哀は『時間切れね』と口の中で呟き、本を閉じようとした。

その時だった。

とろんとした濃灰色の瞳に、邪光が一閃走ったのを、哀自身は気

付かなかった。だが、平凡な日々を終止符が打たれたのを、哀は理由もなく感じた。

哀は、とりつかれたようにその文字列を虚ろに読み上げていく。梵字に近いが違う。文字の正体より大事なのは、文字が記す意味だった。

「ビッグジュエルを、満月の夜に翳せば命の石『パンドラ』が浮かび上がる」

大事なのはそこではなかった。すらすらと読み上げていく哀の目付きが、胡乱に変わった。

「……命の石『パンドラ』を暗黒の昏間　皆既日食の時に翳せば」

それ以上の言葉は出なかった。だが一瞬、哀の口元が薄ら嗤った。悪を貪る魔物のように。

「灰原ア　！」

コナンの呼びかけ声で我に返ったように反応した哀は、本を静かに閉じた。そして、物言わぬまま元あった場所へと丁寧に閉まった。

「分かったわよ！　今行くから待ってなさい」

不可思議な笑みを押し込めた哀は、何事もなかったかのように書斎を後にした。

〈第1楽章〉 動き出した意識（後書き）

こんにちは、神夜です。今度は私が先攻でいかせてもらいました。今回の話はシリ阿斯全開で、しかも主役は哀とパンドラです（パンドラと言っのがみそです、みそ！）。

個人的には、世界のあちこちにキャラを飛ばしたいな〜と思っています。

〈第2楽章〉 タロットカードが指し示す導へ

その日の夕方、哀は何の気無しにタロットカードで遊んでいた。特別楽しんでいた訳ではなかったが、気晴らし程度にはなった。けれど、昼間工藤邸で感じた事がどうしてだか頭から離れずにいて、集中する事は出来なかった。

「あの時感じた、わたしとは違う自分。あれって何だったのかしらね」

まるで別の人格が表に出てきたような不思議な感覚だった。今思えば不可解な事だ。

識らない筈の文字を読めた事も勿論だが、書かれていた内容に惹かれてしまった自分が解らない。

そして、それを目に留めて薄ら嗤った自分に違和感を抱かずにいられない。

「どういう事なのかしら。あの本に何か秘密が……？」

そう呟いてみて自嘲した。馬鹿馬鹿しいと失笑を零す。

まさか、と一瞬掠めた考えも打ち消した。もう一度頭の中で反芻して声に出す。

「何かの呪いとかではなさそうだけど……。とにかく気にしない事にしなきゃね」

そして気を取り直して一枚ずつカードをめくってゆく。するとあるカードを目に留めた事で哀の指先が動きを止めた。

一見何の変哲もない、ただのタロットカードだ。けれど哀の深層で警告音が鳴り響いた。

そして同時に、別の誰かが自分の中で躍動を始めた事に気付いた。ざわざわと全身の血が騒ぎ立てるようで、眩暈さえ覚えるほど身体が震えて止まらない。

「そういう事だったのね。あの時わたしの中に入ってきたのは、遠い昔の……」

そう結論づけた哀の瞳はタロットカードの『塔』を、妖しく映し取っていた。

〈第2楽章〉 タロットカードが指し示す導へ（後書き）

どうも^^ 今回の後攻の暁です。

タロットカードで遊ぶ哀。実はこれには明らかな意図がありました。

そして『塔（ 俗に言うタワーですね ）』の意味する事とは ？

次回、少しは明るみに出るのではないのでしょうか？

では、神夜先生お願いします！

《第3楽章》 ネームレス・シーフ

タロットカードの搭（La Maison de Dieu）仏語で“神の家”）には、無惨に崩壊する搭の様子が描かれている。

正位置でも逆位置でも不吉な意味を示すこの搭は、人間の奢りを表したものだつた。

「神に近付こうとすれば制裁が下される……か。あの有名な、バベルの搭みたいに」

誰もいない闇に浮かぶ鏡へ向かつて、少女は話しかける。搭の絵が描かれたカードを右手で掴みながら、鏡に向かって笑った。だが笑わない。別人を眺めているようだ。いくら笑いかけても、笑わない。笑っていないのか。

それとも、もう自分には微笑みなど必要ないのか
それでも少女はわざと笑う。『哀』の名にふさわしい、悲しみの歌を心の中で思い描きながら。

「エレミヤ書は、遙かなる時を超えて現代にも蘇る。破滅を目撃した者は、絶望した心の響きを伝え、そしてこう謡う……」

声自体は美しく、艶やかだ。だがやたらと物悲しく響く。誰にも届くことなく、夜が深まっても続いた。

「『キッドにライバル出現か！？ 名もなき怪盗あらわる』、か。
ちつきしょう！」

「どうしたの快斗、そんなにイライラしちゃって。購買のパン売切れてたとか？ もしそうなら午後に体育があるし、持たないよねー
っ」

「！ な、何でもねーよ。昼休みをどう過ごそうか勝手だろーが」

怒りに任せて新聞を皺だらけにした快斗の横から、幼馴染みの少女が不思議がつて尋ねた。

我に返り、即席の笑顔でごまかす快斗の怒りを呼び戻すように、青子は嬉しそうに話を掘り下げていった。

「あつ！ これね！ 今話題の『ネームレスシーフ』！」

「『ネームレスうしいふう』？ ハン、単純！ 名もなき怪盗だからなんだろ、それ」

「まあ、そう言われちゃあ元も子もないけどね」

青子の指摘を軽く笑い飛ばし、快斗はそそくさと新聞を折り畳ん

だ。普段ならここで新聞を取り上げて木っ端微塵に破くパターンなのに、何故か顔いっぱい微笑んでいる。

「？ どーしたんだよ？ 何がそんなに嬉しいんだ？」

「ふふふっそれはねえ」

腕を後ろに組んで涼しげに見下げてくる青子に、快斗は目を細める。

勿体ぶるように言い淀む青子に、快斗は当事者だけに不快感を覚えた。

「うまくいけば、キッドと共倒れになるってお父さんが言ってた！」

意外な言葉だった。思わず言い返したかったが、ここでむきになるのは変に思われる、と判断した快斗は得意げに話す青子の話を他人のことみたいに聞き流すことにした。

「この『ネームレスシーフ』も巨大宝石だけを狙ってるんだって。そうなればキッドと衝突するのは必至。放つとしても、どっちかが潰れるんだって。さっすがお父さんねー」

「ふ、ふーん？ そいつは結構なことだ」

「でしょー?」

青子の笑顔をよそに、見た目はマイペースを装っていたが内心穏やかではなかった。だがすぐに、口元だけに余裕を表す笑みが零れた。

「上等だ！ the nameless thief オレに盾突いた代償は高くつくぜ?」

声を出さずに口の中で密やかに呟いた快斗は、太陽の光が強まっていく秋空を見上げた。

〈第3楽章〉 ネームレス・シーフ（後書き）

エレミア書Ⅱ旧約聖書第24番目の書であり、三大預言書（イザヤ書、エゼキエル書）のひとつ。

哀がキッドに挑戦状を叩きつけた（？）……どうなんでしょうか？
ぶっちゃけ、タロットに繋がた暁先生にグッジョブです！ 私
は正直思いつきませんでした！><

《第4楽章》 月下美人への惑い

真円に近づいた漆黒の月が照らすとある博物館。その屋上に舞い降りた影が闇を一閃した。

口角を妖しげに引き上げたその影は、月を見上げて薄ら嗤うと表情を殺して呟いた。

「もうすぐ新月。それまでに見つけ出さなきゃね。皆既日食も近いし、ボヤボヤしてられない」

近日の犯行を省みて思った。狙いを絞らなかった事が敗因なのだと。

そして、『パンドラ』を狙うなら無視出来ない相手の存在を忘れていたと自嘲した。

「もう時間が残されていないのは分かってる。けれど今回は間違いないわね」

独り言だと分かっているながら呟いた。それからおもむろに天を仰いだ。

何処かで自分の声を聞いているだろう『白き怪盗』に届くように。そしてその刹那、望んだ相手の気配が影 哀の全細胞をざわつかせた。

「どうやら来たようね。つまり『パンドラ』である可能性が一段と高くなった証拠。渡す訳にはいかないわね」

口の中で静かに宣戦布告を終えた哀は、予め手に握っていた乳白色のカプセルを飲み込んだ。

「貴女ですか？ 世間を騒がす『ネームレス・シーフ』というのは。しかし…わたしを甘く見て戴いては困りますねえ。本日は格の差を見せ付けて差し上げますよ、……名も無き怪盗さん？」

ポーカーフェイスを保ちながら片眼鏡モノクルの奥では碧い瞳が怒りを表していた。

自尊心プライドを傷つけられた鬱憤で冷やかさは格別だ。
風に靡く白き更衣の裾までが今のキッド……というより快斗としての心情を表しているようだった。

「いい加減こちらを向いて貰えませんか？ 話題の女怪盗さんの顔を間近で」

素直に聞き入れた『ネームレス・シーフ』が振り向いた瞬間、快斗は堪らず言葉を飲み込んでしまった。

暗闇に浮かんだその顔に、一人の少女の面影を見たからだ。

切れ長な眦に薄めの唇。そして特徴的な茶髪が快斗を混乱させた。まさか……？　そう何度も頭の中で反芻する思いを打ち消そうとした。

そんな快斗を見た女怪盗が小ばかりにするように鼻を鳴らして冷たく睨んだ。

「待ってたわ、怪盗キッドさん。いえ……黒羽快斗君？」

その一言が快斗のポーカーフェイスを木っ端みじんに打ち砕いた。

〈第4楽章〉 月下美人への惑い（後書き）

キッド（快斗）のポーカーフフェイスが打ち碎かれた理由は説明不要ですね！ けれど何故『ネームレス・シーフ（哀）』が知っていたのか？

そして、快斗が見た『面影』とは一体何の事でしょう。少なくとも快斗は哀を見知っている（某劇場版より）筈なのに、哀とは特定出来ていません。それは何故？

ヒントは哀が飲んだ乳白色のカプセルにあります……。

とうとう巡り会わせた『ネームレス・シーフ』と『キッド』
初陣を勝利するのはどちらなのでしょう！

〈第5楽章〉 東京上空大バトル

白い怪盗の、自尊心と優越感で揺らめいていた深海色の瞳は、色と輝きを失って大きく見開かれた。

「こんにちは、麗しき大怪盗サマ。ご機嫌はいかが……じゃなさそうねえ？」

聞き覚えのある白々しい美声に、キッドは言葉を失った。

気付けば怪しい女に柵まで追い詰められていたキッドから、まだ言葉が出ない。何か大きな圧力を掛けられ、動けなかったのだ。

追い詰める女の伶俐な顔が、勝ち誇ったように変わった。

「何故、私がキッドの正体を知っているのか知りたいでしょう？
ねえ快斗君、か・い・と・ちゃ・ん？」

「オレを舐めんなよ！」

馬鹿にされた怒りが頂点を越え、怒声を上げた快斗は理性を失った。すぐさま、不敵に笑う女の両手を掴み上げようとした。だが両手を伸ばした先には残像すらなく、キッドは大きくバランスを崩す。

「遅いわよ、それ」

「後ろかあつ！」

気配と共に聞こえた声が背後に刺さり、感情的になったキッドは振り返る。

若い女は、柵を越え、ほうきにまたがって宙へ浮いていた。

「な？ 何だそりゃ？」

震え声を搾り出すキッドに、哀は飄々と答えた。

「見れば分かるでしょ、ほうきよ。譲り受けたもののなの」

「ハハハ、馬鹿なこと言ってるじゃねーの！ 空飛ぶ魔法のほうきなんか持つてる奴、いるわけが！？」

「あら、どうやら心当たりがあるみたいね。世の中って狭いわ」

キッドは急に口をつぐんだ。覚えがあつたからだ。その、ほうきを乗り回す人間が、確かに身近に一人いたからだ。

「私を捕まえられたら、貴方が抱いている疑問の一つは教えてあげるわ」

「馬鹿なこと言ってるじゃねーよ！ 鬼ごっこしようってゆーのか

よ？」

「約束するわ。楽しそうじゃなあい？　それとも」

勝手に話を進めていく身勝手女に、キッドはわなわな震えて立ち尽くすだけだった。

嫌な予感がするのだ。白い翼を広げずに踏み止まっているキッドに、哀は顎を引き出して挑発した。

「私を捕まえられる自信がないのね。……フウ」

「な、何だと！？　上等だ！　その自慢の鼻をへし折ってやらあ！」

哀は、値踏みするようないやらしい目付きでキッドを見下ろした。

「決まりね。フフ、楽しい夜になりそうだわ」

怒りに任せて翼を広げたキッドは、照準をほうきにまたがる女に定め、後を追っていった。

〈第5楽章〉 東京上空大バトル（後書き）

いよいよ、物語の核心に迫る第1歩目に差し掛かろうとしていますね！ 挑発的に突っ掛かる女怪盗サンには、ちょい訳アリらしいですよ！？

大バトルの先には、一体何があるんでしょうか

《第6楽章》 解けてゆく一つめの謎

キッドが打ちつばなしのコンクリート床を蹴り上げて宙に羽ばたく。その姿を捉らえた哀が冷笑で迎えた。

勢いをつけて差し迫るセームの白手袋が哀の手首を掴みかけたが、すんでの所で無情にも避けられる。

「くううう っ！ ちょこまかしやがって！ やべえ、このままじゃ埒があかねー！」

空中戦には自信があつたキッドも、哀が自在に舞い踊るサマに段々と焦りを感じてきた。

加えて、治まらない怒りが判断能力を格段に落としてしまっている事に全く気付いていなかった。

空回りするキッドを、哀は揶揄いを十二分に込めた涼しげな濃灰色の瞳で冷たく遇^{あじ}う。

「あらあ、だらしないわね。もっと楽しませてくれなきゃ。それとももう降参かしら？」

「 っざけてんじゃねーよ！ ぜってー捕まえてやつから待つてる！」

「あらあら、威勢だけはいいのね？ でも簡単には 」

捕まらないわよ、と続く筈の言葉が途絶えた。不審に思ったキッドが目線を走らせ息を呑む。

「あぶねえ　っ！」

「きゃあっ！」

ほんの一瞬の出来事で瞬きさえ忘れてしまった。キッドが叫んだ時には、哀は前方のビルの壁に肩から突っ込んでいた。

完全にバランスを崩した哀は、ほうきから投げ出されてしまった。

「きゃああああ　　っ！」

「チイツ！　世話が焼けるぜっ！」

為す術もなく急降下してゆく哀を、キッドは全速力で追尾する。落下によって身体に掛かった重加速度で、哀の意識は失われていた。

「ちつくしょー！　間に合えええエ　　ッッ！」

裏膝をかけた状態でハンググライダーを器用に操り、キッドは必

死で手を伸ばした。

一瞬掴みかけた哀の手首は、甲斐なくキッドの掌を滑ってゆく。

「やべえっ！ この勢いそのまま飛び込んだら二人ともオダブツだ！」

猛スピードで眼前に近づいてくるアスファルトを睨み付け、キッドは咄嗟にビルの側壁を力任せに一蹴した。

「いっつつっけええ　　つつ！」

漸く哀の二の腕を捕らえ強引に引き寄せる。そして両腕で胸元に抱き留めた直後　　。

「な！　何だア？」

キッドが奇声を発して見据える中、哀の身体から蒸気のような白煙が立ち上り始めた。

《第6楽章》 解けてゆく一つめの謎（後書き）

どうも！ 暁です。事故に因り呆気なく終わってしまった空中戦ですが、キッドにとつての謎が明かされようとしています。

《第4楽章》にて先に触れた事実の回収も含めて、次回、物語が動く！？

《第7楽章》 衝動と悪態

キッドは煙を出す女を抱えながら、とりあえずビルの狭間に身を置いた。

煙は生木を焚いたように膨れ上がったが、すぐに引いてきた。だが、抱え上げていた女の肩幅がだんだん狭まっていく。

現実ではありえない現象に、キッドは『気のせいだろ?』と否定するしかなかった。

やがて分厚い煙は晴れていく。だが、その姿を目に入れた瞬間、キッドは愕然とした。

「な、なんで身体が縮んじまってるんだよ?」

裏返った鋭い声が飛んだ。キッドの腕の中に入っているのはあの少女だった。身に纏っている黒衣も一緒に縮んでいた。そのこともありえなかった。しかし現実は今ここで、確かに起こっている。信じるしかなかった。

やがて、びくりとひと震えした後、少女の長い睫毛が持ち上がった。

キッドは状況が掴めぬまま緊張した。

「う……ん、ここ、は?」

「よかった〜! どーやら大丈夫みてーだな?」

少女はうめき声を上げながら、臃げに答えた。かさばる前髪の間から覗かれるのは、あの白き怪盗の、穏やかな笑顔。

「！　なんで怪盗キッドがこんなところにいるのよ！？　しかもどうして貴方の腕の中にいるの？　まさかあ、貴方……私を誘拐したんじゃないでしょうねえ！？」

「へ……？」

手の甲をペチンとひと叩きされ、少女はキッドの元を離れて警戒した。

「ど、どーしてってよ？　オレがオメーを助けたんだぜ？　ほうきから落ちそうになってさあ」

「意味不明なこと言わないでよ！　ほうきですって？　ほうきで空を飛んでたとも言いたいの？」

「え？　だって本当に」

とんとん拍子に激昂を吐かれ、キッドはただ啞然と目を瞠るしかなかった。きつと今、相当間抜けな顔をしているだろう。

IQ四百は軽く越える優秀な頭脳でも、目の前で起こっていることなのに処理できなかった。

しかし、それは哀も同じだった。

「これ以上話しても無駄なようね。帰るわ。お礼は言わないわよ」

そう静かに言い置き、哀は緋色の髪をふわりと翻した。嫌そうな
渋面をキッドに叩きつけながら、哀は曲がり角の向こうへと消えた。

「な……何なのよいったい？ 何でこんな服着てるのよ？ まるで
魔女みたいじゃない！」

足が勝手に動く。とても速かった。脇目をちらつかせる、見慣れ
ない黒衣から哀は目を背けた。

案の定ここ最近の記憶は、ぼつかりと抜けていた。それらを追い
求める隙を与えないように、哀は夜の街を駆け抜けていった。

キッドはその足で、再び白い翼を広げたとある場所へ向かってい
た。分らないことだらけで、かなり動揺していた。珍しいことだ
ぜ、と皮肉っぽく省みる。

「もうそろそろだな」

低く、不愉快そうに呟いたキッドは、風向きを見ながら器用に高度を下げていく。

視界を蝕んできたのは、茶黒く変色していた森だった。この森の奥深くに謎を解く鍵があると踏んだキッドは、険しい表情で先を急いだ。

〈第7楽章〉 衝動と悪態 (後書き)

インスタントラーメン・哀!？ 『ネームレス・シーフ』になっ
ている間は、記憶がないみたいですね？ またややこしい展開です
が、助けてあげたのに悪たれをつかれた…… + 『ペチン』を一発；
胸糞悪いままのキッドは、あの魔女がいる森へ一直線！

〈第8楽章〉 繋がった行き先（前書き）

長々とお待たせ致しましたm（――）m 久しぶりの更新でスト
ーリーを忘れかけた暁です^^；

〈第8楽章〉 繋がった行き先

鬱蒼と手招きする茶深い森の中心に建つ洋館。キッドは、蔦だか苔だか分からないぐらいの緑に覆われたバルコニーに降り立った。

「苦手なんだよな、あいつ。けど他に当てもねーし、サクッと情報仕入れてずらからねーと。……って、何やってんだ？」

覗き込んだキッドの深碧の瞳に映ったのは、部屋の主がカード遊びに興じている姿だった。時折引き上がる口端が、ふと小さく開かれたまま止まった。

そのままの状態で二、三秒。まるでそこだけ時間が止まってしまったように微動だにしない。そして。

おもむろに泳がせた視線がキッドを捉えた。

「やっぱり来たのね、キッド。いえ、今日は黒羽君として、かしら？」

緋色混じりの涼しげな瞳の少女は、キッドに向かって微かな笑みを見せた。それからカードに視線を戻し、思いついたように問うた。

「あなたも一枚引いてみる？　きつとあなたの探してる答が出るかも。そう　あの子とあなたの因縁、とかね」

「はア？　何言ってつか解んねーよ。大体オレとあの子にどんな」

「それを知る為に一枚どうかって言ってるのよ。さあ、どうするの？」

含みを籠めた視線がキッドを捕らえて離さない。逃げ場を遮るように見透かされて瞬き一つも覚束ない。

キッドは半ば呆れて少女を一瞥した後、カードが置かれたテーブルに近づいて手を伸ばした。

「さあ引いたぜ？　このカードに何の意味があるのか教えて貰おうじゃねーか、紅子！」

「あら、わたしに聞かなくても解るでしょ？　IQ四百もあるんだから、謎なんか直ぐに解けるんじゃないかって？」

「バアロ。確かに心当たりはあるけどよ。……幾らなんでも」

「ありえない……？　一つ面白い事教えてあげるわ。あの子も「そのカード」に惹かれてしまったのよ。そしてあなたが今　。偶然では片付けられないんじゃないかって？」

紅子に投げ掛けられた言葉を、キッドは口の中でかみ砕いた。そ

して答えも見つけた。

深碧の瞳に鋭い光を宿しつつ、片眼鏡モノクルの奥ではポーカーフェイスが現実離れた現実を受け入れていた。

「面白そうじゃねーか。「エ・テメン・アン・キ」　つまり「バベルの塔」が、オレとあの灰原って子を、って事か。フツ…悪いけど負ける訳にはいかねー。キッドの名に賭けてもな」

心の中で静かに宣戦布告を終えたキッドは、暗みかかった空に向かって翼を広げた。そして今まさに飛び立とうと脚に力を入れた時、紅子の言葉が勢いを奪った。

〈第8楽章〉 繋がった行き先（後書き）

キッドも哀と同じカード（つまり『塔』）を引いてしまいました。
これの意図するものとは何でしょうね。

エ・テメン・アン・キに行き当たったキッドは流石です！ ですが、今後の展開が……

どんどんシリアスに向かって突っ走ります！ 多分、次回辺りには話が動きそうですね^^

神夜先生！ お問い合わせします！^^！

《第9楽章》 空洞のページ

常に方向舵がぶれ続けていた白い帆は、予定の倍近くも遅れて目的地に着いた。

考えごとをしていたからだった。

帰り際にあの魔女が言い残した意味深げな言葉、それが自宅に着いた今でも頭から離れない。しかも、あれだけ念を押されたのは初めてだった。

『あの少女に関わるのはやめなさい。そうしないと貴方は滅ぶわ。』

そう、神の逆鱗に触れ、この世から消滅したバベルの塔と同じようにね』

「嫌だね。ってか、もう今更無理な話なんだよ」

大きな独り言を投げやりっぽく吐き捨て、快斗は着替えもせずになベッドへ寝転んだ。

あの少女、灰原哀がパンドラを狙っている以上、接触は不可避だ。だからと言って折れるわけにはいかない。自分には使命があるのだ。父の死についての真相を知るためには、突き進んでいかなければならない。

「あつ。そうだ」

自分の背に押され、快斗は父の肖像画を軽く一押しした。すると、

古びた滑車の音が低く響き、新たな空間が視界の奥行きを作る。
快斗は険しい表情のまま、黙って進んでいった。

「よかった……まだストックはあるみてーだな」

溜め息混じりに柔らかく呟く。残り少ないトランプのストックを確認した快斗の脇目に、一冊の本が留まった。そして、吸い寄せられるように本へ手が伸びる。

「？　こんな本あったっけ？　親父の、だよなあ？　　っ！」

手に取った瞬間、快斗は禍々しい気を感じ、すぐさま手放した。
これはきっと、第六感というやつだ。

どこかで聞いたような懐かしい声が、快斗の脳を直接刺激した。

ソノママ立ち去れ。

サモナケレバ、オマエの身二

床に落ちた本の表紙には英語で『暗黒の天動と地球空洞論究』。
百科事典くらいの厚さと大きさで、色は焦げ茶。染みや擦り切れが
酷いが、辛うじて原形を留めている。かび臭さがそのまま近寄り
たさを表していた。

快斗は理由なく感じた。

この本が、運命を繋げる鎖になる。

そして紅子の言う“破滅”への足掛かりになると言うことを。

「開いてみつか……」

呼吸を整え、快斗は再び手に取った謎の本を開いた。

「快斗坊ちゃま？ どうしたんです 急に呼び出したりして？ ま
あとりあえず落ち着いて下さいませ」

「これが落ち着いていられつかよ！ とりあえずこの本を見て
くれ！」

「本、でございますか？」

言い終わらないうちに、快斗は問題の本を寺井に向かって放り投げた。

明らかに様子がおかしい快斗を尻目に、寺井は受け取った本の表紙をとりあえず見た。

一瞬、寺井の目に力が入った。

快斗は一刹那も満たない寺井の異変を見逃さなかった。

「これはまたけつたいな本でございますねえ。この本が何か？」

「最後の方を見てくれ」

「最後、でございますか？」

流し読みするように、本のページがパラパラと音が立つ。

立ったまま例の本を読み続ける寺井の平静さに疑念を抱きながら、快斗はそぞろに近づいていった。

ページをめくる音が、はたりと止まった時、快斗は寺井の反応を逐一観察した。

寺井の眉毛が、ほんのわずか持ち上がった。

「どーゆーことだ？ 何でページが破れてんだよ？」

「は？　そのようなことを言われてもさっぱり」

わざとらしく不思議がる寺井の態度に、快斗の頭に血が昇った。

「とぼけんなよ！　まだ切り口が新しい。くすんじやいねえ。これは最近破られたもんだ！　親父が破ったんじゃないっ！　だったら寺井ちゃんしかいねーだろうがっ！」

「そんなこと言われましても……ねえ？　知らないものは知らないんですよ？」

「……くっ！」

ゆっくりと瞬きをし始める寺井から、快斗は本を分取った。埃臭さを荒息で払いのけながら、問題のページをくだりから声を荒らげて読み始めた。

「『汝、パンドラを探すべし。パンドラの箱も探すべし。暗黒食の日にパンドラを翳し』」

不自然な箇所で朗読を切り、快斗は寺井の顔を見据えた。初めて見る形相だった。血の通わない剥製のように佇む寺井は、まるで別人のようだった。

「『穴を開けるべし』。さすれば……で切れてらあ？ どーゆ
う意味なんだろうな？」

「坊ちやま」

寺井らしき老人は静かに笑った。

「一刻も早くパンドラを、誰よりも早く見つけて下さい。そして月
明かりに照らし、その輝きを永遠に封印して下さいまし」

〈第9楽章〉 空洞のページ（後書き）

暗黒の天動と地球空洞論究、そして暗黒食にパンドラを翳すと『穴』が出来る

結構コマが揃ってきましたよね　さて、寺井は何か知ってそうですが。

ここでちょっと整理してみましよう。

工藤邸と黒羽邸にあった『暗黒の天動と地球空洞論究』。天動といたらアレ、地球空洞論っていたらアレ（せ、説明になっていませんよ；）。　

快斗と哀の決定的な違いは、哀は最後まで読んでるってことです。寺井の様子からして、快斗に全てを話してくれそうもないですね。

〈第10楽章〉 幾重にも固めた決意の証

寺井の躊躇い、それは単に老婆心に過ぎなかったかも知れない。幼い日から成長を見届けていた寺井にとって快斗は孫も同然、いや、それ以上の存在だった。

半端な気持ちでパンドラに係わって欲しくない。けれど逆に、快斗の思いは痛いほど解っていた。自分もかつては従事しながら盗一の背中を追っていたのだ。

しかし今回ばかりは黙って見送る事は出来なかった。それだけ危険を伴う事例だと自らに言い聞かせた。

「快斗坊ちゃま。寺井は先程『パンドラを封印』するようにと匂わせましたが、本心を言えば係わって欲しくないのですごいます」

「はア？ だったら何で言うんだよ？ あれでオレは完全に煽られちまったぜ。もう止まんねーし、最初っからそんなつもりもねーから」

強い信念を宿した瞳で寺井を見据え、快斗はどう牽制すべきか考えた。剥製から少しだけ人間に戻った寺井が、観念したように弱々しく目線を返す。

そして重苦しい息を長々と吐き出し、奥の部屋へと姿を消した。

二分か三分の後、戻ってきた寺井の手には卓上金庫ぐらいの大きな箱が抱えられていた。それを恭しく快斗に差し出すと、寺井は小さな声で呟いた。

「これも、快斗坊ちゃまがキッドを継いだ時から決まっていたのかも知れませんか。もう寺井は何も言いません。坊ちゃまの好きになさいませ」

「……寺井ちゃん、これは？ まさか　！」

目を見張って竦む快斗に、寺井が無言で頷く。虚飾に染まった蠟人形のような顔は、完全に血の色を滲ませていた。

判っていたのだ。既に目の前の少年が手を借りなくても自分の足で歩いていける事を。

九割の誇らしさと残り一割の淋しさを飲み込み、寺井は弱く微笑んでみせた。

「その箱の中には、坊ちゃまの欲する答が　。ですがくれぐれも暴走なさないように、それだけは寺井と約束してくださいまし」

「　。わあ　ったよ寺井ちゃん。サンキューな？ それから　」

済まねーな、と心の中で謝罪した快斗は、即座に踵を返した。パンドラに気が逸っていたからではなく、気持ちの切り替えをしたかったからだ。

寺井に背中を向けた快斗の表情はもはや少年のものではなかった。一瞬不敵に歪んだ口許も直ぐに引き締め、『怪盗キッド』の顔が露になる。

「じゃあな、寺井ちゃん。次に逢うまで達者でな」

今生の別れを思わせる言葉を穏やかに落とした『キッド』は、譲り受けた箱を一度強く見据えてから脇に抱えた。

そして闇夜に白き翼を広げ、渾身の力を脚に籠めて大地を蹴り上げた。

「快斗坊ちやま、お気をつけて。……盗一様、どうか快斗坊ちやまをお守りくださいまし」

漆黒の空に消えゆく快斗の姿を飽きる事なく見送った。残された身としては無事を祈る他には何も出来ない。

快斗が白い点になって漸く、寺井は淋しげに深い息を吐いた。

それから間もなくの事だ。江古田の街から快斗の消息が跡絶えた。

〈第10楽章〉 幾重にも固めた決意の証（後書き）

快斗が消息を絶ちました。寺井にもそれは解っていた事だったのでしよう。出来れば引き止めたかった思いを飲み込んだ寺井の気持ちを、実は快斗自身知っていたのだと思います。

それでも無視するにはパンドラは重い枷のように付き纏い、快斗ばかりか哀までも飲み込もうとしています。快斗の行き先に何が待ち受けているのか、そこでどんな事実が突き付けられるのか！

遂に大きく動き始めた運命の歯車、果たして事の顛末は如何に！？

《第11楽章》 暗黒のバラル

《混乱の塔》 バラルノトウ

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。

言葉はひとつ、ただひとつ。当然、意思疎通を取りやすい。会話が弾み、知恵もまとまりやすい。

民は簡単に集まり、一致し、野心的な計画を企てた。

「さあ、みんな！ 天まで届く塔を建てて“有名になろう”。そして、その塔がある場所にふさわしい、世界一セレブな町を造るのだ」

「ああ。名声を上げよう。我らの力を全地に轟かせよう」

「そうだ。塔を建てて、天の領域に迫ろう。我々の地が、世界で一番であることを知らしめよう」

都市建設の計画を企てた人間どもは、シナルの平野を拠点とすることに決めた。

石の代わりに煉瓦を、しっくい代わりにアスファルトを材料にして、日ごとに塔が出来ていく。高くなっていく。

神の領域は近い。もうすぐだ、あと一息だ。

早く建てるのだ。塔を、塔を、何よりも高く。天まで届け。天を突き破れ。そして、全地に我らの存在を知らしめよう。

「何てことだ」

目線をちらつかせる煉瓦の塔を見て、神は憤りを言葉に表した。

「彼らは皆、ひとつの言葉を使っているから、神の領域を犯すようなことをし始めたのだ。……愚かなことだ。このままではまずい。手が付けられなくなってしまうのは、時間の問題だ。　　そうだ」

神は手を上げた。辺りが急に暗くなる。次の刹那、すさまじい雷鳴が神の手に集まった。

「^{バラル}混乱しよう、^{バラル}混同してやる。　　これで、塔は建てられなくなる」

神の右手が、ためらうことなく振り下ろされた。
おどろおどろしい天の劫火が、塔へ向かって真っすぐに落ちた。

夥しい数の岩塊が、強烈な熱を浴びて硝子化した。方々へ散らばった。

そして民も。各地へ散らされ、知らない言葉を埋め込まれた。

こうして、塔の建設は中止された。

「……そうだ」

神は笑った。神らしくない下卑た笑いだった。

「暗黒を作ろう。神に近づく者には制裁を下そう。暗黒の先に『穴』を作ろう。この塔を暗黒に染めよう。そして」

頭が二つに裂けた巨大な煉瓦建築を壊した張本人が、しれっと一瞥しながら漏らした。

他人事のように話すその姿に、どす黒い裏の顔があった。神は、場合によっては人類の味方にもなり、そして敵にもなるのだ。

「穴を『あの場所』に繋げてやる。そしてこれはそのための餌だ。餌に群がる人間どもに制裁を下してやろう」

町の残骸へ向けて神は嗤いながら、光り輝くひとつの石を放り込んだ。

再び、シナルの地に太陽が昇った。

世界一の繁栄を企てた都市の痕跡は、今『ジググラト』にある。かつての城塞都市 神の門とまで呼ばれた町 B a b i l i m は、荒野に埋もれたまま捨て置かれ、そのまま現在に至っている。

だが。

『それはあくまでも言い伝えである。事実が途中から歪曲された。』

“バルル” された痕跡は、実際は神の力によつて ㊦

「まずいことになった。次の“暗黒食”まであと半年を切つてしまつた」

「それなのに、パンドラの行く方が掴めていない。だからそんなに焦っているんでしょう？」

「そうだ。時間がない。もし“奴ら”よりも先に渡つてしまつたら」

「ハハハ、きつと大丈夫でしょう。もつと前向きに考えようよ？」

「……相変わらず軽いねえ？ 君はいつもそうだ。真面目に話しているのが馬鹿らしくなる」

軽い、と皮肉たつぷりに言われた男は、上品に携えた形の良い口髭をさすつて同じ調子のまま続けた。

「我々以外、どの組織に行き渡つてもいけないんだろ？ ハハハ、

そんなことくらい分かってるさ」

両極端な態度で言い合っているのは、二人ともほぼ初老近くの男で、聡明さ、勇猛さ、そして気概が見るからに満ちている。平均的な明るさを保つ室内から、二人はテレビ電話で交信していた。

「まあ、家に切り札とも言える本があるから大丈夫だよ。息子にでも頼んで米^{こめ}国へ送ってもらっさ」

どこまでも軽快な口調で投げ掛ける口髭の男に、切れ長の双眸が目につく男が重々しく額に手を当てて大きく愚痴を零した。平らな画面越しの会話だが、取り囲んでいる雰囲気は熱く、緊迫している。

今、交信している二人は、片方はニューヨーク、そしてもう片方はロサンゼルスにいる。アメリカ大陸の東西にまたがっている、夥しい隔たりも感じられないくらいに白熱していた。

「送ってもらって……！？」 まさか日本^{あっち}にあるのか？ 日本
の工藤邸、に……！？」

「そっだよ」

「ええええっ！？」

口髭の男を非難するように、切れ長の双眸が特徴の男は声を荒らげた。だが、叱責を受けた男はその咎の重さを全く感じていないように、とぼけた表情を包み隠さずに見せた。

「おいおいおい、優作君！ 馬鹿だか抜けてるんだか天才なんだか、未だによく分からないよ。どうしてそんな迂闊なことを……！ 普通、手元に置いておくだろうが！ あれは、命よりも大事なものだだよ！？」

「お誉めの言葉をどーも。君だってそうさ？」

優作と呼ばれた男は、喉の奥で声を響かせ『君だって』の部分をあからさまに強調する。

「君みたいなのがICPOの人間だって言う方が世も末ってもんだよ」

どちらともなく、静寂に飲み込まれるように自然と黙り込んだ。いがみ合いではない。彼らは、話し込めばいつもこうなる。高等な知能を持つ同士で、お互いの腹を探り合う行為が楽しいのだ。

「とにかく！ 一刻を争う事態となる前に、そして手遅れになる前に、先手を打っておくのが賢い人間のさだ。じゃあよろしく。とりあえずあの本を早く手元に！ ……でもまあ大丈夫だろう。君に任せておけばまず大丈夫だろうから」

「ああ、任せてくれ。何かあったらすぐに連絡する」

不敵な笑みを互いに送り合い、通信画面は余韻も残さずに消えた。
一人だけの空間に、再び夜の閑寂が蘇った。

優作はふと窓辺に視線を向けた。

今夜もいつもと変わらない、ありふれた月下の夜景色だ。マンネリと化した日常を守り通すことが、どれだけ難しいのかをまだ優作は知らない。

「このままでは『穴』が開いてしまう。あの黒羽君でも手に負えなかった『暗黒』を……我々が力を合わせたくらいで何とかなるんだろうか？」

冷たい拳を窓硝子に当て、トン、トトンと叩き始める。その叩く間隔は次第に遅くなっていった。優作は珍しく弱気になっていた。

「ないだど！？ どーゆつことだ新一っ！」

初めて聞いた優作の凄まじい怒号に、ただ動じていたコナンは受話器を落としそうになった。

全身から動揺が溢れ出る。コナンは、面と向かって言われない分まだよかった、と論点がずれたことに対して安堵の溜め息を出した。

「ねーもんはねーんだよ？　本当にその場所にあったのかよ？　勘違いとかじゃねーのか？」

「それはない！　お前はいじってないんだろう？」

「……そ、そーだけどさ」

自分から二十センチくらい離れた受話器を、コナンはおずおずと近づけて弱腰で答えた。全く心当たりがないのにも関わらず一方的に非難されているが、迫力と鬼気が凄まじくて反抗できない。

「じゃあ誰かがいじったんだろう！　書斎に人を入れたことは当然あるんだろう？」

「そ、そりゃまあ」

「とにかく！　その本がないとまずいことになるんだ！　新一、その本を探し出すまでカードをストップするからな！」

優作の叱責を一方的に聞いていたコナンは、ここで反論した。聞き流せない展開に風向きが変わったからだ。カードを止められたら

当然、生活が出来なくなる。

両手で受話器を持つ力が、ぐっと強くなった。

「ち、ちよつと待てよ父さん！ カード止められたらどーやって生活していくんだよ！？」

「じゃあ何とかして探すんだな？ 見つかり次第すぐにL Aの家まで届けるように！ いいなっ！」

「あつ！ ちよつと待てよ！？ くっそう！」

一方的に電話を切られた。無機的な機械音が、駆け抜けるように居間中へ響き渡る。

コナンは優作の横暴さに対する怒りに任せて、受話器を元の場所へ置いた。

「何なんだよ？ 一方的に言われてもねーもんはねーんだよ！ ……それにしても」

熱くなった手を顎に当て、コナンは宛もなく馬毛の絨毯上を歩き回る。

独り言が出ない。そのくらい集中していた。
あの温厚でおおらかさが代名詞である優作が、あそこまで怒気を出すなんて。きっとその本は、よっぽど重要なのだろっ。

とりあえず、コナンは身体中から冷静さを呼び寄せ、最近書斎に入った人間を新しい順に思い出してみることにした。

先行く足が急に止まった。

心当たりが心の疑念とかち合った。あの時、書斎を出てからの“彼女”はどこか様子がおかしかった。泥棒が入った形跡はなかった。だとしたら、消去法で消していけば

「 あいつだ！ 灰原だ！ 灰原の仕業にちげーねえっ！」

ありつたけの力で駆け出したその時、携帯電話に着信が入った。阿笠からだった。

この状況で出る気はなかったが、仕方なしに出たコナンの形相が更にひしやげた。

「なんだって！？ は、灰原がいなくなっただってええ？」

〈第11楽章〉 暗黒のバラル（後書き）

お久しぶりです、神夜です。

聖書から引用……というか、著作権に引っ掛かりそうなので、要所所の言葉だけをピックアップしました。文そのものそのまま引用じゃなく、単語だけなら大丈夫でしょうから。

さて……。制限文字数（暁先生との間では、何点か決まりがあるのです）がめっちゃめっちゃオーバーしてしまいましたが、今回は特別つてことで、OK（あれはオツケーでいいんですよ、暁先生？）を貰いました。

途中までは旧約聖書・創世記の一部分より『バベルの塔』のくだりを私の言葉でまとめました。

この辺は知っていると思います。神の領域に近づこうとする愚かな人間達をバラバラにして、力を分散させたんです。

神が言う、

『餌』はパンドラのことです。永遠の命を手に入れようとする、神に近づこうとする人間に『制裁』を下す。パンドラは神が仕組んだ罠だったことが、十話過ぎで発覚しましたっ！

バベルの塔は、実は一般的には『ジググラト』（現イラン／現イラク付近）の荒野にあると言われていますが、実は違うんだと前半最後で匂わせています！

優作の傲慢っぷりが冴えた（？）回でもありました；

パンドラを狙う組織が、ひとつだけじゃないことも判明しましたね！

盗一自身が永遠の命が欲しいわけじゃないのは原作から伺えるので、そこらへんは使わせていただきました。ICPOの知人も、原作から拝借しました

〈第12楽章〉 壮大なる冒険の幕開け！？

何もかもが唐突過ぎた。優作からの強引な申し付けもそうだ。大
体が説明不足で意図が解らないのに、酷な条件まで挙げられ思考は
困惑を通り過ぎていた。

それに加えてだ。

「確かなのかよ？ どっかに出掛けただけとかじゃ」

思い付いた言葉を取り敢えず返し、コナンは反面考えを巡らす。
あの時、哀がどんな風におかしかったのか 何処に違和感を覚え
たのだろうか、と。

けれどもはっきりとした答は見つからなかった。今思い直せば勘違
いだったのかも知れない。普段からミステリアスな哀の事だ。たま
たまそう感じただけでも考えられる。

「何回も家中捜したんじゃ！ 出掛ける時には必ずわしに行き先を
告げる哀君が黙って出ていくとは考えられんよ。それに、最近の哀
君はどこか掴み処が無くてのお」

阿笠のうるたえる震えた声が耳に届く。コナンは一旦、巡らせて
いた思惑から意識を戻した。

確かに阿笠の言う通りで、哀が何も告げずに忽然と姿をくらます
理由に見当が着かなかった。

「わあッた！ とにかくオレも少し捜してみっから。それと、灰原が居なくなっただのって大体いつ頃か分かるか？」

「……そうじゃのお。つい一時間ほど前に地下室に降りてゆくのは見たんじゃが、それきりじゃ」

「て事は、それから直ぐに家を出たとしても…そんな遠くには行つてねーって事か。わあッたよ博士」

オロオロと右往左往する気配と共に、溜め息混じりに呟く阿笠の声が耳に着いた。ゆつくりとスピーカー部分を耳から離し、終話ボタンに指をかける。そして。
そのまま指先を眼鏡に滑らせ、レーダーのスイッチを入れたコナンは舌打ちをした。

「探偵バッヂの反応がねーな。もう圏外に出ちまったか、若しくは初めっから持ってたねーのか……。どっちにしてもこいつじゃ捜せねーって事か」

もう一度舌打ちして玄関の壁を殴り付けた。ドスツという鈍い音と共に、拳の先から全身を痛みが走る。顔をしかめ顰て歯噛みしたコナンは、その表情に怒りを露にした。

「いってー何処に行っちゃったってんだ？ バッヂを持ってるってね

「って事は、灰原のヤツ戻る気がねーのかよ　　！？」

一番欲しくなかった結論を漏らして拳を握り締め、突き抜ける激痛に悲鳴を挙げた。見れば数カ所の擦り傷から血が滲み、既に乾き始めていた。

怒りに任せた自傷行為の代償は高くついたと反省したコナンは、その場で深呼吸し考えた。

「何か手懸かりを残してるかも知んねーな。闇くもに捜しても埒があかねーし、一度博士ん家に行ってみつか」

特別な根拠があつた訳ではないが、一つの可能性としての事だ。もしどこか遠くに行くとしたら、哀なら下調べをするのではないかとコナンは考えた。

直の行き先にぶち当たらないにしても、関連付ける情報の一つぐらいは得られるだろう。そう思い当たって玄関を飛び出した。

勢いが付く前に阿笠邸の玄関に飛び込むと、コナンは直ぐさま地下室を目指した。部屋全体を見回してめばしい場所を虱潰しに当たってゆく。

家捜しする後ろめたさが無いでもないが、この際なりふり構ってられない。優作に突き付けられた条件が、コナンから冷静な判断能力を奪っていた。

「悪く思っなよ灰原、こつちも生活が懸かってんだ。父さんが欲しがってる本を見つけれーとマジやべーんだ」

心配して覗きにきた阿笠の視線を背中に感じながらも、コナンは手当たり次第部屋中を引っかき回した。書棚の医学書やら薬学書をぶちまけ、机の引き出しを乱雑に荒らしまくったりで、見る見る内に空き巣が一仕事終えた後のような惨憺たる現場が出来上がる。けれど、それでも見つからない手懸かり。

「ちくしょー！ ぜってー何かある筈なんだ。せめて父さんが言ってた本ぐらいは見つけねーと」

段々募る苛立ちに、コナンは血走った目線を泳がせてそれをぴたりと止めた。すると瞬時に閃く。情報収集にはもってこいの逸材を目の前にして、口角をいやらしく引き上げて嗤うコナン。

駆け寄ってモニターの電源を入れ、一つ一つのファイルや履歴を読み漁ってゆくコナンの目が大きく見開いた。そして思わず疑問を声に出してしまった。

「な　っ！　マジかよ！？　っつーか、何考えてんだ、灰原のヤツ」

モニターに釘付けになったコナンの水晶体に映し出された物はエ

アチケット予約サイトの最終ページで、そこには『宮野志保』の名前でモスクワ行きのチケットを購入した痕跡があった。

《第12楽章》 壮大なる冒険の幕開け！？（後書き）

些か自己チューなコナンでしたね。あそこまであからさまに自己弁護しなくつても……な感じで；

所詮このお話では脇役（？）なので、本人はふて腐れているのかも（笑）

でもコナンのお陰で哀の行き先が判明しましたね。モスクワに何をしに出掛けたのか気になる処です。まあ、暁としてはどこにそんなマナーがあつたか、の方がツツコミところですけど；

あとは、哀の留守中に博士が肉料理を食べたりしないか心配ですね。

……と、冗談はこの辺で。モスクワに飛んだ哀を待ち受けているもの、そして更に動きを速める運命の歯車。

日本を飛び出したパンドラ追求劇の第二幕の始まりです。作者自身飲み込まれないように努めさせて頂きますm（——）m

《第13楽章》 除 福

暗い。真つ暗闇だ。

まるで闇が闇を呼んでいるかのように、この部屋には闇が詰まっている。

「ボス、私です」

突然現れた黒い影に、ボスと呼ばれた者はひと笑みした後何かを投げつけた。

深闇の中で速く動く物体を、目下の若い男はわずかな風圧のずれをあてにただけで掴み取った。

「……収穫はあつたみたいだな？」

「ええ」

男にしては高く、女にしては低い声質が、中性的な印象を与えている。

ボスと呼ばれた者の声は、くぐもっていてはつきりしない。表情は闇と同化しているため、全く分らない。

黒のつば付き帽子、楕円形のサングラス、そして黒子のように顔面全てを覆っている黒布 全て、闇色だ。

「しかし、この世に怨念というものは本当に存在していたのですね。所詮本は本です。燃やせば消えてしまふ。でも、心の弱い部分へつけ込むくらいなら出来る。そんなところでしょうか？」

「そうだな、除福。この世に、お前くらい意志が強い人間しか存在していなければ、このような『アクシデント』は永久に起こらないだろうに」

除福、と鷹揚に呼ばれた者は一寸の乱れもない完璧な拳措で腰を極限まで引くかがめ、敬礼をとった。

偉そうな声調を喉奥から響かせるボスは、靴音を高く掻き鳴らし除福へ近寄った。

「ははは。こちらとしては、ありがたいアクシデントですけどね。

それより、あの本の所在、やっと掴めましたよ？」

「除福、正確には『あの本の片割れ』だろう？ あの本は二冊そろって初めて一冊となる。一冊だけでは意味がない。それで？ 今、どこにあると言うのだ？」

「モスクワです。見事に『道化』された少女が持っています。これは確かな筋です。組織の力を駆使して調べましたから。かなり苦労しましたけどね？」

「ほう、モスクワか？」

言下にさらりと答えた除福に、ボスは白々しく驚いた。始めから

そう言ってくるのを想定しているかのようにだった。

「おそらく『あの場所』へ行くつもりなのでしょう」

「フン。ソ連を破滅に追いやったあやつの終着点に、か。エリツインも、最期の最期まで奇特な運命を辿ったものだな？」

「『夢の跡地』……ですね。どうします？ もう少し泳がせておきますか？」

「追え！ 早急にだ！ 次の暗黒食まで限られた時間しか残っていないのだ！ そんな流暢なことを言ってられるか！ 本を奪ったらついでにその小娘を処分しろ！」

凄まじい怒声だった。布越しでもはっきり響いた。だが涼しい顔をしてやり過ぐす除福は、口を閉ざしたまま慇懃に首を垂れた。そしてそのまま、闇中へと溶け込んだ。

「フン……。雑魚ごときで神の領域に触れようとは、愚者めが。仕方がない。私が神に代わって『あの者』と同じ運命を辿らせてやろう。……黒羽盗一も仲間が増えて、きつと喜ぶだろう」

喉奥で低く響かせた不気味な笑い声が、しばらくの間部屋中を駆け抜けていた。

十数時間ぶりに降り立った地には、日本人には物珍しく映る石床が長々と続いていた。

空の青は奥深く、どこまでも透き通っている。そのせいか、いいように汚染された街・東京とは比べものにならないほど吸いやすく、みずみずしい空気だ。

哀はその場へかがみ、擦り減った薄茶色の石床にそっと手を触れた。とても冷たい。心の芯まで染み渡る冷たさだ。

「私は……どうしてここにいいのかしら」

激動のロシアを駆け抜けてきた分厚い石畳に、哀は煽られるがままの不安をぶつけた。

この百年、色々なことが起きすぎた。

ロシア革命が勃発し、そして誕生したユーラシア大陸の大部分を制した赤の国、ソビエト社会主義共和国連邦 エスエスエスエル 略称CCCP。宇宙進出も、核開発もアメリカをわずかにリードしていた。

だが、百年も経たないうちに、積極的に他国へ侵略し世界中を脅かしてきた世界一巨大な国は、呆気なく滅びた。

哀が今いるのは、赤の広場、ロシア語でクラッシーバヤ・プローシャチ。クラッシーバヤ 赤はロシア語で『美しい』を意味する。赤の国でなくなつた今でも『赤』 美しさは健在である。

この石畳の上には、人々が衝突し、血が飛び交ったかもしれない人々の汗、喜びの涙、そして悲しみの涙も染み込んでいると思うと、感慨深くなる。

今日もこの上を人が歩く。そして、明日も明後日も。

訳が分からないまま、哀はここまでやって来た。本の意志に導かれるがままだった。『そこへ行け』と語りかけてくるのだ。理由なく従った。だが反抗する気は起きなかった。何故だか分からない。向かう先は、ただの礼拝堂だ。

鐘楼だろうか。白壁によく映える玉葱頭が五、六個一際目立つ黄金に照り輝いている。

「ここが……『夢の跡地』ね。この地に、世界中を震撼させる巨大な塔が立つはずだったのね」

ただの礼拝堂を、哀は驚嘆を込めて見上げた。

エリツイン前大統領の葬儀が行われた場所で一躍有名になった、救世主キリスト大聖堂である。ロシア正教会モスクワ総主教の首座聖堂でもあるこの建物は、全長百三メートルはある。

小さいわけがない。

だが本来ここにあるべき建物と比べると、途方もなく小さいのだ。哀はこの建物の裏へ回った。

人気はない。皆、きらびやかな黄金の輝きに目を取られて裏まではやって来ない。

とりあえず探索を始めようとしたその時、突然凄まじい風圧で両足を取られた。実際は、数人の輩に身体ごとすくい取られたのだった。

「うぐ……！」

湿った布を口にあてられ、哀は意識を失った。

〈第13楽章〉 除 福 （後書き）

頑張つて進めましたっ！ や、やつと哀を『夢の跡地』へ運びました……！

まず、前半のボスと部下らしき男『除福』との会話。

物語の核心に迫る伏線がうようよ、そして今までであった謎が解けた部分もありました。

この、ボスなる人物のイメージは、藤子不二雄Aの『プロゴルファー猿』に出てくるミスターXです。真夏でも黒子姿、黒手袋……彼には『暑い』とゆー感覚はないんだろうか？ と子供心に思っていました。

そして、この除福。除福はかな〜り！ 重要人物になっていきます。秦の始皇帝をだまくらかした人物でもあります（実在したのかは疑わしいが）。除福と名乗る者の正体は？ ……もちろん、コナンキャラですよ。

『あの本』。2冊そろって1冊になるんだって。哀が持つてると、快斗が持つてると合計2冊。

うわ〜。この辺、かな〜り！ ラストへのネタバレっぽくなっちゃったけど、大丈夫かなあ？

哀抹殺指令も出たことだし、とりあえず緊迫した展開なのは相変わらず……ですね。

〈第14楽章〉 流れ込む意識が見せた現実

意識を失う刹那時、ゆるりと絞られてゆく哀の瞼の内側を閃光が疾り抜けた。それと同時に別の意識が哀を支配した。

生憎その意識が直接表立つ事はなかったが、眠りに就いた哀は、哀でいて哀ではなくなっていた。

眼前に広がる無尽の荒野。人ひとりどころか生命の息吹さえ感じられない、ただ荒れ果てた広大な大地。目線を遙か前にやれば一字の地平線が寸分の起伏も湛えずに百八十度、いや、振り向けば三百六十度繋がって見える。

地球を真つ二つに割り、その上に置き去りにされたかの孤独感と、とめどなく湧き上がる絶望感。

空を浮遊するようなふうわりとした感覚の中で意識を覚醒した哀は、目の当たりにした光景に息を呑む事も吐く事も出来ず、その場に固まった。

「……ここは？」

僅かに回転の鈍ったままの思考を駆使しても、出てきた言葉はたった三文字の単語。それ以上、気の利いたものは一文字も浮かばない。

そして哀は違和感を覚えた。
急に大地が騒ぎ始めた。かと思えば烈しく揺らぐ。立位を維持出来ないほどの躍動を、大地が始めたのだ。

「な…に、これ！？　どういう事　！？」

徐々に、そして確実に強くなってゆく揺れに対し、哀は抵抗する術も無ければ身を任す宿り木さえそこには存在しなかった。

暴れ狂う大地のうねりに恐怖を感じ始めたその時、哀の意識に直に訴える『声』が轟いた。

『殺せ！　破壊の限りを尽くすのだ　！　我に牙を剥く者には際限なき苦しみを与えよ！』

『ああ……御慈悲を！　一体わたくしが何を　！？　あなた様の怒りに触れるような事などは……』

『またしても不可侵の領域に足を踏み入れた愚者が現れおったわ！
殺せ！　殺せ　！』

『畜生　っ！　弱者はいつでも砂を噛めと言っのかあ
っ……』

地の底から聞こえる幾多の怒声に怒哭が、神経という神経を鋭利な刃物で切り裂いてゆくかのように哀の細身を駆けずり回る。

しかもだ。

刻一刻と時を遡り、かと思えば逆戻りして時代背景さえはつきりしないのだ。恐らくは、この地に流れた数多の血が作り出した怨念の連鎖なのだろう。

そう解釈する哀を、間髪入れずに新たな思念が襲う。そしてその思念こそ、遙か離れた地で交わされた『除福』と『黒子』の会話で、状況までもが映像化されていた。

『フン……。雑魚ごときで神の領域に触れようとは、愚者めが。仕方がない。私が神に代わって『あの者』と同じ運命を辿らせてやろう。……黒羽盗一も仲間が増えて、きつと喜ぶだろう』

極めつけの文句と共に、黒子の頭に描かれた『黒羽盗一』であるう者の気配が浮かび上がる。更に除福と呼ばれた若者の顔が、スポットライトを受けたように産毛一本までが鮮明に明るみを帯びた。ビロードを思わせる艶やかな栗色の髪と、薄く閉じられた切れ長の

瞼。
それを目の当たりにし、びっくりと跳ね上がった哀の鼓動が、除福が誰であるのかを物語る。それは、怪盗キッドにとっては……有り得るが辛い現実だった。

「！ はく ！ まさか彼が！？ でも何故 ！？」

叫びたい言葉を発する事も出来ずに飲み込む。代わりに、極限ま

で見開かれた双眸が哀の動揺と驚嘆を代弁した。

『“何故？”の嵐』に翻弄される哀の意識はそこでぶっ飛んだ。小さな身体には許容を超えた意思の流入によって、防衛本能が働いた為だ。

再度遠退いてゆく意識下、哀の懷から囁くような声が漏れ聞こえてきた。その主、例の本が悲しげに、そして朧げに微光を放つ。

『我が身を消滅せしめよ。さすれば総てが終わりを迎える。後生だ……』

振り絞られた切実な響きと、怪盗キッドに向けられるどす黒い陰謀、そして自身に降り懸かろうとしている兇悪なる事態の狭間に立たされた哀。意識のあるう筈のない少女の眦から一粒の雫が流れ落ちた。

どれほどの時間が過ぎた事か。全身に伝わる鈍い痛みと冷たさに、哀は目を覚ました。覚束ない思考を総動員して状況把握に努めると、焦点の回復していないままの網膜が先程の記憶を呼び覚ました。

同時に沸き起こる絶対の違和感に、出しかかった言葉を喉元で止めたが、俄かに活動を始めた頭脳がそれを拒む。

「わたし、どうして……？」

全開にされた双眸が捉えたのは規律正しく敷き詰められた石床だった。先程、嫌というほど見た真一文字に切り通された地平線は何処にも無い。夢と現実が入り混じって、朧げにも一点を直視出来ない。

混濁した意識のうちにふらふらと立ち上がり振り向いた哀の目線は、薄暗い室内をさ迷った。何が何だか解らずキョロキョロと見回す。完全に闇目に近い状態が哀から平静を奪い取ってゆく。

ヤバいくらいに動揺する哀は、毛ほどに残っていた理性を保って部屋中をうろつくうち、壁に裂け目がある事に気付いた。

「やったわ……！　もしかしたら人が通り掛かるかも知れないわね」

力が入らない足を気力だけで前に出し、哀は赤煉瓦の壁に近づいた。一縷の望みを込めた言葉も報われた。

射し入ってくる太陽光が、壁の向こうが外界である事を指し示している。眩しさに目を細めて、瞑りたい衝動を必死に抑えた。そして哀は亀裂を覗き込み、視界で捉えられる限りの周囲を見渡した。

と、そこへある少年の姿が飛び込んできた。

刹那、哀が持っている本が“何か”と共鳴するように輝きだしたが、哀は未だそれを知る由は無かった。

〈第14楽章〉 流れ込む意識が見せた現実（後書き）

やつほゝい！ 除福の正体が明らかになりました！ まさか彼だとは……。だから執拗に快斗……キッドを追うのか！？

賛否両論だろう展開となつてまいりました。どうか最後までよろしくです（＾Ｏ＾）

〈第15楽章〉 引き合う意識（前書き）

展開の都合により《第14楽章》の一部、最後の行間後を修正致しました。今回の《第15楽章》を読まれる前に再読される事をお勧め致します。

ご面倒をお懸けして申し訳ありませんm（――）m

《第15楽章》 引き合う意識

「？ 何処だ？ 今の声」

足を止めて振り向き、声がした方へと当たりをつける。切った言葉は口の中にしまい込んだ。少年、黒羽快斗は尚周囲を見渡して声の主を捜した。

けれど微かに気配を感じたものの、その姿を捉える事は出来ない。努めて冷静を保っていた眉根をぴくりと攣らせ、指先を白いダウンジャケットの胸元に滑り込ませた。

「それにしても何だつてんだ？ 『喋る本』 ってのも珍しいけどよ」

自宅のからくり部屋で見つけた例の本を取り出した快斗は、そう呟いて天を仰いだ。そしてあの日の事を顧みた。

寺井を訪ねたあの日、快斗は譲り受けた箱を自宅へと持ち帰り、固く結ばれた封印の帯を解いた。それからもどかしく指先を動かして薄紫色の袱紗を剥ぎ取り、生唾を飲んで恭しく蓋を引き上げた。

「……へ？」

快斗は自分の目を疑った。入っているべき物が入っていないから。何度も瞼を擦っては見返す。けれどその度に、快斗の瞳に映るのはがらんどうでしかなかった。感情に任せて舌打ちをし、そんなバカな！ と口の中で呟きを繰り返す。

すると、中に納められていた“何か”が快斗の意識に語りかけてきた。

『“赤”の地に我を運べ。そこにそなたの欲する答があるだろう。天の頂きを冒涇した者が“夢を見た場所”。これだけ言えばそなたなら解るであろうな 黒羽快斗……いや、怪盗キッド』

初めは自分の耳を疑った。けれど直ぐに気付いた。その声が直接脳に訴えかけてきたのだという事に。

鼓膜の振動が一切なかったのに、その声はやけに大声量で脳幹を突き抜けたのだ。実に不可思議な出来事ではあった。だがしかし、快斗は自然と受け入れていた。もはや、何故その“何か”が自分の正体を知っているのかなどは問題ではない。

「パンドラが実在するって事は確かみてーだしな。世の中、まだまだおもしれー事がありすぎるぜ！」

息巻いて、最高のマジックを成功させた時のような“したり顔”を見せる快斗の口端が不敵に引き上がる。碧い瞳に宿った探求心は

最高潮に煽られてゆく。

と、快斗は蓋の開けられた箱を目端に捉えて首を傾いだ。やはり
払拭出来ない疑問が過ぎり、つい声に出して呟いた。

「けど、どうして寺井ちゃんはこんなもん持ってたんだ？ 何か物が
入ってるってんなら解つけど、アレってのは……」

正直、快斗は箱の中身を破られたページだと思っていた。自分の
熱意を汲み取った寺井が、封印していたそれを差し出してくれたの
だ、と。

それなのに実際はどうだ。何も入っていない箱を取り上げた快斗
は、覗き込んで底を強く睨んだ。そして　。

「何だか解んねーけど、確かめてやろーじゃねーか！ パンドラを
見つけたして全ての謎を解いてやる。それで親父の背中に追いつけ
るんだったら　」

例え信じ難い現実を目の当たりにしようが構わねーよ、と口の中
で宣言して盗一の肖像に強い眼差しを贈った快斗は早速先程の『言
葉』を紐解く事にした。

『赤の地』

『天の頂きを冒流した者が夢見た場所』

二つのキーワードから連想されたのは、哀が目指したのと同じ場所だった。モスクワに在る『ソビエト宮殿』跡地　かつて時の覇者が儚く散った『遺恨の地』だ。

今なお当時の栄華が侘しく遺る『神の逆鱗に触れた』　そして『神に見限られた』辺境への絞った快斗は、直ぐさまからくり部屋から飛び出して自室の机に隠してあったパスポートを手にした。

そして今、降り立った地を“何か”に導かれるように探索していた訳だが、快斗にはそれが例の本に依るモノだと薄々気付いていた。からくり部屋で箱を開けた後、それまでの無機質さは失われていたのだ。

生命とまではいかないが、息吹を感じさせられた。理屈ではなく、付き従ってみようと抵抗なく思う事が出来た。

「とにかく“ここ”に何かあるつてのは間違いねー。っつーか、妙な胸騒ぎがすっけど……気のせい、じゃねーよな」

懷に本を戻し慎重に辺りをもう一度見渡した。すると自分を射抜くような視線を感じる。快斗はその視線の源を突き止めるべく、神経を集中した。

瞼を閉じ、研ぎ澄まされてゆく意識を張り巡らすと、胸元が微かに温かくなってくるのを感じた。

「もしかして、レーダーって事か？　だとすると、何かの手掛かりが眠っているかも知んねーな」

確証は無い。しかし気になって仕方なかった。快斗が暫く円を描くように半径二十メートル程度の範囲を周回すると、思った通り反応が強くなる。

期待した答を導き出す事に成功した快斗は、口端を引き上げてほくそ笑んだ。

「こつちか　！」

叫ぶよりも早く駆け出した快斗は、総煉瓦造りの廃屋を目指した。次第に胸の辺りが総毛立ってくる感覚に見舞われ、全身の血という血が騒ぎだした。

走りながら眩暈される意識を気力で前に進め、やっとの思いでたどり着き息をつく。そして次の刹那、倒壊を始めた建物を前にして咄嗟に身を退いた。

薄暗い部屋に僅かばかり入り込んでくる光が、室内の様子をぼんやりと浮き彫りにしてくれる。哀は一旦室内に視線を戻し、それを頼りに目線を巡らせた。

けれど、瞳に映るのはまるで生活感の無いがらんどうだ。家具の

類は一切見受けられない。見上げれば天井、見下ろせば石床、四方を囲う煤けた赤い壁以外は皆無で、廃屋である事は明らかだった。工藤新一の面影を湛えた少年が駆けてくるが、直前で進路を変えてしまう可能性だつて否定出来ない。何とか見つけだしてもらふ為の最善策を模索したが、上手く考えが纏まらない焦りが哀を支配した。

冷たく隔たる赤煉瓦の壁を恨めしそうに睨みつける事しか出来ない哀は、奥歯を噛んで嘆息をつく。

「まずいわね。何とかあの人に気付いてもらわなきゃ、わたしはきつと……。でもどうしたら」

焦れば焦るほど建設的な考えから遠退いてゆく。終いには自嘲じみた笑いを浮かべて諦めの溜め息を短く吐いた。その時だ。

「！ きゃあ っ！」

突如その存在を知らしめるように閃光を放つと、その本が歌いだした。悲しみを連想させるほどに切なげな旋律が赤壁に反響してハウリングを起こす。

徐々に高まってゆく音域が異常反響して建物全体を揺るがすと、見る見るうちに壁が崩れ落ちた。

「すい……」

茫然と立ち尽くす哀の身体は光の輪に包まれて、そこだけバリアが張られたように石顆てが避けていった。下敷きになる事を覚悟していた哀は、ただただ言葉なく顔をあげて前を見据えた。

すると目が合った。駆けてきた少年も既に足を止めて立ち竦んでいたみたいだったが、哀の存在に目を丸くした。

「何でオメーがここにいるんだ？ …… っつーか、大丈夫、か？」

「何とかね。で？ 馴れ馴れしいあなたは誰なのかしら？ 顔と声は」

「工藤新一みたい… ってか？ わりーな、名を明かす訳にはいかねーんだ。それに、そんな状況でもなさそうだし、な」

いきなり顔つきを変えた快斗を見て、哀の表情にも緊張が滲む。体中が危険信号を発していた。いつの間にやら四方を囲まれ、刺すような視線…… 殺気がぶんぶん漂ってくる。

“ヤバい” と思ったのもつかの間、怒声に近い声が轟いた。

『馬鹿な奴だ！ みすみす殺されにやってくるとはな、黒羽快斗
いや、怪盗キッド！』

思いがけず知ってしまった事实に、哀は眉根を引き上げて無意識に呟いた。

「黒羽って、それじゃ…あなた」

それ以上何も言えなかった。哀は、打ち消すつもりでこの場は続く言葉を無理に押し止めた。

〈第16楽章〉 訪問先は1千万分の1（前書き）

一千万……モスクワ市の人口です。

《第16楽章》 訪問先は1千万分の1

背からはひんやりとした風で、そして正面からは奔めく熱気と殺気で身体が板ばさみになっている。

全て雑魚だとしても、不特定多数相手に戦って勝機はあるのか。

《馬鹿ね。自分を過信していると命取りになるわよ？》

「逃げるっきゃねー、か。だがよ？」

紅子のなまめかしい美声が聞こえてきたような気がして、快斗はつい声を出して答えてしまった。

独り言を呟いたのかと思った哀は、快斗の後ろに回りながらどきまぎした様子で訊く。

「え？ 今、何て言ったの？」

「何でもねーよ！ さ・て・と。どーすっかなあ？」

快斗はそう声裏を強く響かせて自問すると、身体中あちこちを動かし、首、肩、足首、そして指の関節を豪快に鳴らし始めた。

戦う気だ。瞳に油がのっている。自暴的な自殺行為に、哀は必死になり快斗の上着を引っ張っては止めに入った。

「逃げるに決まってるじゃない！ な、何目の色変えてるのよ？ こんな大勢相手にして勝てるわけないでしょう？ 幸い、逃げ道が出来たわ。ここは逃げるが勝ちよ！ さあ、早く逃げるわよ！」

「そーはいかねえよ」

「どうしてよ！？ ……貴方、まさか戦闘マニアなの？」

ハハハ、と感情がこもっていない笑い声を転がした後、快斗は全身を緊張させた。

やはり戦う気だ。哀は力ずくでも引っ張っていこうと決めた。

「ここは『戦う』が正解だ」

「はあ？ どう考えたって勝てるわけないじゃない！ ほら逃げるわよ、早く！」

哀は力の限りを尽くして快斗を引っ張るが、所詮は子供の力だ。大人以上の体力も潜在能力もある快斗は一ミリも動かない。

「……下がってろ。とにかくここは戦うぜ？ もう決まったことなんだ。それとこれ、持つといってくれ」

白いダウンジャケットに包んだ本を哀に突き出すと、快斗は無数の銃口相手に真っ正面から向き合うために前へと進んでいく。

哀は呆れた様子ではいい、と大きくため息をひとつ出した。そして自分だけでも逃げられるように、半壊した赤煉瓦を目がけて後ろ足で進んでいった。

「最期の言葉は交わし終わってたか？」

黒帽子に大きめのサングラス、そして黒スーツに黒手袋といったマフィア気取りの男たちが、黒山のようにわんさか湧いている。その中のどこから、どすを利かせた声が吐き捨てられた。

「ああ。とりあえず戦えって言われた」

「はああ？ 誰に言われたんだよ？ あのガキじゃねーよなあ？ 必死に止めてたもんなあ？」

「……フン」

快斗は後ろへ一瞥投げたついでに相槌を打った。

哀は不可解に首を傾げた。快斗が目を合わせた先は、自分ではなく預けた本だったからだ。

行動も思考も全く読めない一応は『味方』に、哀は祈るような気持ちで捧げた。

「『いざ戦わん。さすれば汝、先に進めるであらう』 か。まさか本に言われたからって言うてもよ、誰も信じねーだろうなあ？」

啖っぱが吐かれた破擦音が、殺伐とした部屋中へと轟いた。

「なーにぶつぶつにやにやしていやがるんだああ？ やつちまえ！ 蜂の巣にしてやらあつ！」

おお、と掛け声が湧き上がった途端、無数の銃口が快斗へ向けられた。リーダーらしき男が促す通り、そして文字通り『蜂の巣』だった。

「馬鹿……！」

見ていられなくなった哀は、両目で手を覆い顔を隠した。間を空けずに駆け抜けてくる銃声と破壊音が、だが同時に複数のうめき声が生まれては消え、生まれては消え……の繰り返しがあった。

そして、何かが床に落ちる軽快音や床を滑り転がる細長い摩擦音まで出てきた。

不審に思った哀は、右目の瞼だけをおそろおそろ持ち上げた。

「嘘……！」

で 驚愕を込めて見据えた先には、この状況を心から楽しんでいる殺^た

陣師がいた。

銃を足蹴りにされ丸腰になった輩どもが次々に、あるいは同時に快斗へ襲いかかる。だが当の快斗は、八方からの攻撃を軽やかな身のこなしであっさり避けていく。

更に『おらおらおらっ！ そんなもんかよオメーらは！』だの『一気にかかってこいよ！』だの『戦いがいがねーんだけだよ？ 準備運動にもならねーぜ、おい？』だのと、挑発する文句を手当たり次第に投げつけては飛び上がり、回し蹴りを繰り返したり両手で殴りかかる始末だ。

「どう見ても完全な戦闘マニアね。心配して損したわ」

はあ、と今日二度目の大息を吐いた哀は、苦笑いを滲ませた。

大立ち回りを演じる快斗のパノラマには、マフィアの大群が木枯らしのように虚しく舞ってはばたたと地へ落ちていくさまが描き出されている。

あとひいふうみ、と数えるほどしか生き残っていないマフィア達が、間合いを取って最後の悪あがきを画策していた。捨て身の戦法を企んでいる。それは一目瞭然だった。

「そろそろ終わりね　っ！？」

「？　どーした？　っ！」

少女のわずかな引き声を耳で捉えた快斗は、前方を牽制しながら振り向いた。

そこには、怒濤の構図があつた。何とか意識を取り戻した雑魚が再び銃を持ち、哀のこめかみに突きつけている。

「動く……なああ！　少しでも動いてみ、な？　ウヘヘヘヒヤフヤアヒヤヒヤアハハアア！　このガキの脳みそがぶっ飛……ぶぜ、えエ？」

「ちいい！」

呪わしげに吐き捨てた快斗は、硬直したまま佇んでいる哀を一直線に見つめた。銃口を引くまでに一足飛びで飛びかかれればいいだけの話だが、刹那の差が命取りだ。

どうする、さあ……と問いかけた瞬間、重みのある音がした。改めて紫紺に輝く瞳を見開いてみると、あの本が白いダウンジャケットからひよっこりと姿を表していた。

「ん？　何だ？　本……か？」

「！　　今だっ！」

雑魚の注意が落ちたその本に向いたと同時に、快斗は哀を目標けて地面を蹴り上げた。

「　　その本を奪ええ！　とりあえずいったん引く！　早くしろ！」

口答えする間も与えずに降り懸かるけたたましい剣幕に、雑魚は震え上がった末に従った。

雑魚は目の前に横たわっている本を拾い上げ、痛みを押して渾身の力を込めて剣幕を上げた男へ放り投げた。

宙を舞う本が仄に青く輝いたのを、快斗は確かに捉えた。慌てて手を伸ばしたが、あと数センチ足らなかった。

「よし！ 引くぞ！ おい小僧、今回は引いてやるが次はそうはいかねーからなアア！ 偉大なる我らが神主「ゴッド・マスター」に盾突く愚か者が、死んで地獄に行けるとは思っなよ？ お前らが行き着く先は『穴』の狭間だ 覚悟しとけええ……！」

典型的な捨てぜりふと、喉の奥で引き攣った笑い声を無理して吐き出し、生き残った三人は自分達の足音によってせき立てられるように闇の中へ逃げていった。

砂塵が舞い上がり、嵐は去ったことを物静かに告げた。

「……ごめんなさい」

「あん？ 何がだよ？」

極度の緊張が解かれ、へたり込んだ哀へ快斗は手を差し延べた。

「あの本……奪われてしまったわ。大切な物だったんでしょ？」

申し訳なさそうにぼそぼそと告げる哀に、快斗はやっぱり笑った。

「取り戻せるもんならいくら取られても構わねーよ。命以外のもんなら、取り戻せる自信があっからな」

「フフフ……たいした自信ね。でも、貴方なら有言実行しそう。そんな気がするわ」

「だろー？ とりあえず、今オレが泊まってるところまで来いよ？ あのウクライナホテルだぜ？ すっげーだろ！ 一息ついてからゆっくり話でもすつか。なあ？」

答える代わりに頷いた哀は、差し延べられた大きな手を握り返した。

口だけではないこの少年。とりあえず彼についていけ、と頭のどこからそう指示してきたのを、快斗は知るわけがなかった。

実行部隊からの報告を受け、除福は生きた心地がしなくなった。灰原哀を殺し損ねたからだ。舌でも引っこ抜いて手土産にでもしようと思行部隊に指示したが、事態は一転した。逆にこちらの舌を抜かれそうだ。言い訳すら出来ない現実が、除福を叩きつけた。だが、本だけは何とか奪取出来た。そのことだけでも報告すれば、首はへし折られてもかろうじて首の皮一枚で繋がるだろう。除福は息を切らせながら、ボスが待つ指令室へと急いだ。

「愚か者がああ！ 何たる失態だ！」

「え……？」

本を渡すなりいきなり剣幕を上げられた除福は、ただ呆然としてボスを見上げていた。

投げられた本が除福の頬へもろに当たり、すぐさま熱を持った。もしかしたらあざになったかも、などと言っている場合ではなかった。

「っつー！」

右足を一步ひいて片膝をつき、右腕を胸の前に置いては首を深く垂れる、といったこの上ない敬礼は、敬意を払ったボス本人に左肩を蹴られたことによって難なく崩された。

右頬と左肩、そして一番痛む心の傷が、満身創痍の除福へと容赦なく襲いかかる。

「ボス……？ どうしてですか！？ 確かに灰原哀抹殺は失敗しました。しかし、当初の目的は成し遂げましたよ？」

「たわけが！ この本ではない！」

「しかしっ！ 表紙には確かに『暗黒の天動と地球空洞論究』と書いてありま……！」

除福の美しい声が、恐怖に圧され引つ込んだ。

ボスへと向かう視線が、泥濁した憎悪と怨念を捉えたのだ。今まで見たことがない迫力だった。死ぬくらいですめば運が良い、と本気で思ってしまった。

「……この私に、口答えする気か？」

サングラスの向こうで激昂と輝く邪光が、除福を更に追い詰めていく。

「い、いえ、そんなことは」

「フン、これは『雄本』だ。私が欲しいのは『雌本』の方だ」

「？ 雄本、雌本……ですか？」

「そうだ。それは雄本だ。雄本には『まだ』用がない。用があるのは雌本だ。具体的には、雌本の隠しページだ」

「隠しページ、ですか？ それではボスは、雌本に用がある？」

ああ、いつもの冷静沈着な様子に戻ったボスは、辺りを鷹揚と歩き始めた。

聞きたいことは山積にある。だが、会話についていくのがやっとだった。今の除福には相槌を打ち、基本事項を訊くことしか出来ない。

「大変申し上げにくいんですが、その雄本と雌本、二冊必要ではないんですか？ でしたらとりあえず、この本だけでも保管しておいた方がいいのでは？」

「この私に指図するなどいったらどう？ フン、出来損ないの死に損ないのくせして。任務もこなせないようでは、お前の母親はいつまでたっても還ってこないぞ？」

「そ、それは……」

今のままでは夢のまた夢だろうなククク、と底意地悪くボスが罵った。

本が二冊存在することなど、聞いていなかった。正直、理不尽である。だが悔しいが、失敗は失敗だ。ここで文句を言うのが小者だろう。事実、与えられた任務を何ひとつ遂げていない。

「本は今の持ち主に返しておけ。早急にしろ。いいな？ ロシア国内で東洋人などと、目立つことこの上ない。すぐに見つかるだろう。そうでなければ、色々と不都合が生じるのだ」

「！ 言っている意味がよく分からないんですが？ 何故、わざわざこの本を返すことなどしなければならぬのです？」

敬礼をしなおした除福を、ボスは感情に任せて思いきり蹴り上げた。今度は胸を目がけて一直線に。

除福は吐き出しそうな溜飲を両手で抑えた。与えられた衝撃のせいで、鼓動が激しくなり呼吸を邪魔した。

「口答えするなと言っただろう！ 考えがあっでしていることだ！ 下僕の分際でいちいち突っかかってくるのではない！」

「……分かりました。除福ことこの僕」

肩を上げ下げしながら何とか呼吸を整えようとする除福は、再び片膝を立て拝礼の格好をした。

全ては、母親のためだ。そのためならプライドくらい、簡単に捨

てられる。

「白馬探が、今度こそその命を果たしましょう。貴方様のしもべでありますこの僕に　今一度お任せ下さい」

従順な言葉を並べ、出来る限りの敬意を払った除福・白馬探はボスの反応を見ないまま闇へと消えた。

今世で現存する数少ないスターリン様式の建築物、ウクライナホテル。見上げる者にたちまち威風を抱かせる。

社会主義の発展と革命の達成を願ってつくられた装飾的で権威的な新古典主義建築だった。つまり十八世紀後期に、啓蒙思想や革命精神を背景として、フランスで興った建築様式である。

だがそれすらも、かつてあつた威光だ。

労働者をおおいに励まし、気持ちを奮い立たせよう。社会主義を讃え、それら全てを芸術で表現しよう、と。

『実を結ぶ』『創造的だ』『正しい』といった、この三拍子の集大成が建物の頂上に高さ百メートルのレーニン像を掲げた四百十五メートルの超高層ビル……があるはずだった。

それが、ソビエト宮殿だった。儚くも、幻の巨像。今更『もしも』をほざいても、虚しいだけだ。ソ連が崩壊した現在、それらを語る行為は負け犬の遠吠えより愚かしい。

高さ百九十八メートル、ロケットのような形をしていて、ちょうど『山』の字に似た建物である。モスクワの伝統を語り継いでいるホテルとして、すこぶる名高い。そのホテルの一室に、呼び鈴が鳴った。

「？ ルームサービスなんて頼んでねーよなあ？」

モスクワ川の穏やかなせせらぎを眺めていた哀は、首を縦に振る不審に思った快斗は、とりあえず覗き穴から確認してみることにした。

「どつしたの？」

覗いた途端、快斗の様子がみるみるうちに変わっていく。

更に瞳の色を濁らせる哀は、固まったまま動かない快斗へ近寄ることにした。その途中で、驚くべき言葉を耳にした。

「白馬……！？」

哀も快斗同様に、その場で硬直してしまふ。と同時に、再びあの会話が脳裏へと届いた。

『フン……。雑魚ごときで神の領域に触れようとは、愚か者めが。仕方がない。私が神に変わって『あの者』と同じ運命を辿らせよう。……黒羽盗一も仲間が増えて、きっと喜ぶだろう』

「駄目ええ！ 開けちゃ駄目ええ！ 絶対に開けちゃ駄目よ！ 駄目駄目駄目駄目っ！」

「へ……？」

遅かった。あと一秒、速ければ。
哀の絶叫も虚しく、扉が物々しく開かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6634c/>

暗黒ダイヤのエレジィ

2010年10月28日07時01分発行